【 会員投稿 】

雑誌を読んで雑感

大槻伸次

朝食後、いつもの様に新聞に目を通してから、先日購入したボイス(Voice)という雑誌を手にした。
雑誌をぱらぱらと捲って、最初に目にしたのが片山杜秀氏著(慶應義塾大学准教授)の『海ゆかば』清貧の美学だった。副題として“西洋の響きの向こうに垣間見える「純正日本」とあり興味を惹いた。
内容は、明治生まれで日本作曲界の 2 大巨人『海ゆかば』の作曲者である信時潔(のぶとき・きよし)氏と、対するもう 1 人の巨人『“からたちの花”や大作オペラ等』に代表される山田耕作氏との 180 度異なった音楽観について論じている。
信時氏は明治20年生まれ、山田氏は前年の19年生まれで一歳年上だった。2 人ともクリスチャンの家庭で関西に育ち、ともに上野の東京音楽学校に学び、お雇い外国人に師事する。そして、ともベルリンに留学し、没年も同じというように経歴が非常に似ている。
ところが、信時氏の日本は、山田氏の『古今和歌集』や『源氏物語』や江戸三味線音楽等々に象徴される、複雑で繊細な情調に満ち溢れた日本と違って、『万葉集』のおおらかで生一本な日本であり、漢詩文や謡曲のモノクロームな日本であり、背筋の伸びた武士道な日本だった。
そこで、山田氏と信時氏は明治人の「柔」と「剛」の体現者に他ならなかったというのである。その結論として『海ゆかば』は、日本の伝統音楽とキリスト教や西洋音楽に挟まれて育った明治人である信時氏の極まりで、西洋の伝統(七音階)と日本の伝統(五音階)が共に息づく旋律線を持った歌で、尚且つ非常時の精神の体現する稀代の張りを示す曲であると云っている。
だが残念なのは戦時期の「第二の国歌」とされることで、総力戦体制化の国民生活の困苦欠乏と一体で記憶されてしまったことは、信時氏の栄光でもあり不幸でもある。しかし、彼の音楽的達成は、戦時の国民的緊張の経験の回想ばかりに閉じ込められてしまってよいものではなく、その『海ゆかば』をはじめとする作品群には、今日にも通じる簡素や質素や清貧という観点から、新たな命が吹き込まれねばならないと著者は結んでいる。
私は、読んでは見たものの音楽観たる難しい理屈はわからないし、評する資格も教養もないが、そのこととは別として、第二の国歌とまでいわれた『海ゆかば』について特別な関心を抱いた。そこで、書籍やネットなどを参考に信時氏や『海ゆかば』について調べてみた。
『海ゆかば』は、『椰子の実』、『めんこい子馬』、『隣組』、『ああ紅の血は燃ゆる』などとともに、当時の日本放送協会の肝いりで作られた数多くの歌の一つであり、日本政府によって国民精神強調週間のテーマ曲として日本放送協会が信時氏に嘱託して完成された曲だという。1937 年 11 月 22 日に日本放送協会の大阪放送局で初放送され『国民歌謡』(戦後の『ラジオ歌謡』で『夏の思い出』も其の一つ)の一曲として広められたものである。
出征兵士を送る歌として愛唱され、国民の戦闘意欲を高揚させるべく制定された曲だったというが、この曲を大いに印象付けたのは「玉砕のテーマ」として用いられたことだったようだ。すなわち、太平洋戦争末期におけるラジオ放送の「大本営発表」の際に、その内容が玉砕であった場合、番組導入部のテーマ音楽として用いられたという。ところが、信時氏自身若い学徒までが出征するに及んで、大いに苦しむことになったようだ。
私自身、『海ゆかば』という曲を知ってはいたが、特別な関心を持って聞いたことはなかった。そこで、どんな曲想なのかユーチューブ(You Tube)で動画を探したら、歌手の奥田良三氏(年代物のフィルムからで画面が雨降りしていた。数日後、不法投稿で削除されていた)が歌っているのが投稿されていたので早速聞いた。その他、伊藤久男、森繁久弥氏らが歌っているのも投稿されていたが奥田良三氏のものが最も憂いがあった。
♪海ゆかば水漬く屍　山ゆかば草むす屍…確かその曲想から感じられるのは荘厳であり日本的、あえて言うなら鎮魂歌風だと思った。何回か聞いたが、複雑な余韻が残ったのは確かである。歌詞は、奈良時代の政治家であり万葉歌人の大判家持(おおとものやかもち)の古歌から引用したものであるという。
さきの大戦において、何百万という若者は、聖戦という国の最高指導者の言葉を信じ、『海ゆかば』で精神を高揚させられ戦場に赴き、お国の為と青春を棒に振って一度きりの命を捧げたのである。ところが大本営発表は国民を欺き、果ては戦いに敗れ、国民を悲惨な状態に導き投げ捨てたのである。そこで言いたい、過去も現在も一国の最高指導者たるものは国の進路を誤らず、国民を不幸にするようなことの無いよう、叡智と信念を持って政治を行い、最大限の努力をなすべきである。
最近の日本社会は、ちょっと前までは考えられないような事件が多発している。そこで、日本人(日本社会)全体が劣化している云々の話題が、新聞や雑誌などで取り上げられているが、現状は目を覆うばかりである。
日本は敗戦から 60 有余年、米国の庇護の下(米国の日本精神劣化政策が成功)？曲がりなりにも平和が持続され、そこそこ豊かな社会が実現したが、皆がぬるま湯に浸かっている間に茹で蛙となり、政治は停滞し、官僚は跋扈しやりたい放題である。しかし、如何なる事があろうと、日本の国政を担う、政治家や官僚までもが劣化(腐敗)してもらっては困る。
2012 年はギリシャを震源とするヨーロッパ通貨ユーロの激震を受け、世界同時不況に直面し、そのしわ寄せとして、経済弱者と呼ばれる人達を直撃している。また、政治に於いては巨大な財政赤字、円高、震災復興、医療、年金、教育、領土など問題山積である。そこで、今こそ与野党が対立している暇など無い筈であり、官民一体となって俊足(時間的余裕はない)にこれらの難題に取り組み、世界の範となる日本の再建に取り組むべきときだろう。「下手な心配休むに似たり」かも知れないが、再び信時氏を苦しめたいつか来た道に逆戻りしない為にでもある。

会員投稿のご協力有難うございます。現在の未掲載原稿は、二件です。引続きよろしくお願いします。

● 今月の【 細野水彩画廊 】:『 希望の春 』
http://www18.ocn.ne.jp/~hishimig/hosono2013-04.pdf

●【 須永写真ギャラリー 】:『 芽吹きの頃 』
http://www18.ocn.ne.jp/~hishimig/sunaga2013-04.pdf